

甲虫 ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 4 (Dec. 1968)

## 日本産タマムシ科解説(3)

黒沢良彦

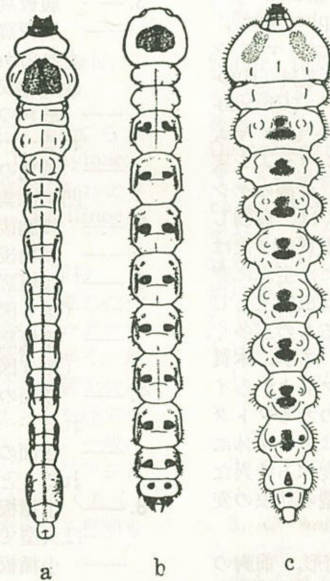
幼虫の外部形態 幼虫の構造については既に湯浅啓温博士が詳細な記載を発表しておられ(農事試験場彙報第2巻2号, 1933), さらに戦後では矢野俊郎氏によるチビタマムシ群の各種の比較検討が加えられている(四国昆虫学会々報, 第3巻2号, 1952)ので, 他言を要しないが, 湯浅氏の発表された中から要約すれば次の通りである。

「幼虫の色彩は全体としては, おおむね乳白色であるが, 頭部及び前胸の背腹両面の硬皮板は通常暗色である。なお, ナガタマムシ亜科の第10腹環節の又状突起及びチビタマムシ亜科の或種の体上にある斑紋なども暗色である。全形はオタマジャクシ形(第2図a), 円筒形(第2図b), あるいは楔形(第2図c)などで, 大体において扁平である。

体は小さな頭部, 大きな胸部(特に前胸が著しく大きく発達して頭の様になることがある), 及び10環節の腹部からなり, 胸部と腹部の各環節の境界はおおむね明瞭である。頭部は比較的小さく, 前口式, 扁平で前胸の中に退縮する。触角は中位, 3節からなり, 単眼は全く欠く。上唇はかなり大きく, 弧状に突出, 上顎は短く強, 歯を有し, 多少匙状を呈する。下唇もよく発達, 下唇枝は2節よりなる。下唇枝は著しく退化して微小, 環節を欠く。前胸は通常体の諸環節中長さ幅共に最大, その腹背両面には各1個の, 通常大きく発達し, かつ互に酷似した硬皮板を有し, この板上には1条の縦線, またはA, Λ, Π形などの線状ないし溝状

の暗色又は明色の紋がある。中胸と後胸は通常前胸に較べ極めて幅狭く, かつ短い。胸脚は欠いているが, その痕跡を有するものが多い。部腹の各節は第10節を除いて, 他はほぼ同形, 第10節は極めて小さく, 尾毛を欠き, 後端に縦の切れ目を有し, その間に肛門が開くが, ナガタマムシ亜科(第2図b)ではこの環節は前方の諸節と同大で, 後端に又状突起を具え, その間に肛門の小さな切れ目がある。この又状突起は硬化し, その内側には通常2個の小歯状突起があり, 突起の基部にはやや密に刺毛を生ずる。また, チビタマムシ亜科の潜葉性幼虫(第2図c)では, 第10節は小さく円筒形, 特に切れ目を有することなく, その中央に肛門が開くに過ぎない。気門は新月形で, 中胸の両側にある1対は大形であるが, 第1~8腹環節の各側背方にある8対は小形である。

前胸の背腹両面にある硬皮板が移動器官としての機能を有するらしいことは, 既に Leisewitz が説述した所で(1906), 学者中にはこれを移動板(Ambulatory plate)と称する者がある。また, 体側, 特に前胸に著しく生じた刺毛は恐らく硬皮板の機能を助けるものであろう。ナガタマムシ亜科の第10腹環節にある又状突起もまた移動器官であることも Leisewitz が既に論じた所で, 此様な突起を有するものでは一般に前胸の硬皮板の発達が悪いことも同様に彼の提唱した通りである。また, 腹部, 稀に胸部の背, 腹, 側面に瘤状突起を有することがあるが, これもまた移



第2図 タマムシ科の幼虫の3型  
a. *Chrysochroa fulgidissima* Schönherr タマムシ  
b. *Agrilus auriventris* E. Saunders ミカンナガタマムシ  
c. *Trachys yanoi* Y. Kurosawa ヤノナミガタチビタマムシ  
(湯浅, 1933より模写)



動器官と見なされ、移動突起 (Ambulatory tubercle) と称せられる。特にチビタマムシ亜科の潜葉性幼虫に著しく、クロタマムシ亜科では通常中後両胸にのみ現れることが多い。此様な幼虫でも前胸硬皮板の発達はやや鈍い。

本科の幼虫の主要な標徴はその前胸の構造にある。コメツキダマン科 (Melasidae または Eucnemidae) の或種の幼虫にも本科に類似した硬皮板が存在するが、その条紋は全く分離した2本の側線であるので容易に区別し得る。またカミキリムシ科 (Cerambycidae) の幼虫にも本科の幼虫に似たものがあるが、これでは硬皮板は本科幼虫と同程度までに発達しないか、或いは腹面に背面と同様な硬皮板を有しない点によって判別できる。ヒラタムシ科 (Cucujidae) の幼虫も極めて扁平で、やや本科の幼虫に類似する所がないこともないが、よく発達した胸脚を有することによって直ちに本科と識別できる。」(湯浅, 1933)

幼虫はその形態で次の3型に分けられる。

第1型 (タマムシ型)、ほぼオタマジャクシ状、刺毛多く、前胸は著しく扁平で大きく、円盤状、第10腹環節は著しく小さく、突起がない (第2図a)。この型にはウバタマムシ亜科 (Chalcophorinae)、ツツタマムシ亜科 (Polycestinae)、ツブタマムシ亜科 (Sphenopterinae)、クロタマムシ亜科 (Buprestinae) およびムツボシタマムシ亜科 (Chrysobothrinae) の幼虫全部と、例外的にチビタマムシ亜科 (Trachyinae) のうちのケンタマムシ族 (Aphanisticini) の幼虫が含まれる。最後のケンタマムシ族以外の諸亜科の幼虫は、多くは、衰弱したかまたは枯死して間もなくの樹木の木質部または樹皮下に穿孔する穿孔虫であるが、稀には生木に穿孔するものもある。ケンタマムシ族の幼虫は主として禾本科植物や羊歯植物の茎に穿孔するものが多く、前記諸亜科の幼虫と形態的に相似しているが、本質的には全く異なるものである。なお、アフリカからインド、インドシナにかけて多くの種類のあるフトタマムシ亜科 (Sternocerinæ) の幼虫は体の全体に長毛を生じ、土中において樹木の根を食べる特異な形態と生態をしているが、やはりこの型の幼虫の変形と考えられる。

第2型 (ナガタマムシ型)、ほぼ円筒形、前胸の拡りは著しく弱く、硬皮板の発達も弱い。第10腹環節は幅広く、叉状の硬化した突起がある (第2図b)。此の型にはナガタマムシ亜科の幼虫だけが含まれる。多くの種類は樹木の枝幹の形成層の内外を食害し、生木に加害するものも少なくない。日本にはまだ発見されないが、草本の茎に穿孔するものもある。

第3型 (チビタマムシ型)、第1型の変形とも考えられる型で、楔形または紡錘形で、極めて扁平、前胸を除く各節の両側または背面と腹面に瘤状隆起があり、第10腹環節は短い円筒形で、先端に切れ目も叉状突起もない (第2図c)。この型にはケンタマムシ族を除くチビタマムシ亜科の幼虫が含まれ、

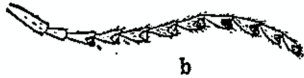
いずれも潜葉性で、草本、木本の両方の葉に潜入するが、植物の種類選択性が強く、単子葉植物への潜葉例を知らない。

日本産のタマムシ科の中で幼虫の形態の判明しているものは僅かではあるが、諸外国での例も加えて、分類して排列してみると、大体において成虫の分類に一致するのは、当然ではあるが、大変興味深い。

分類 タマムシ科は12の亜科に分けられるが、日本にはその中7亜科だけを産する。ここでは各亜科の検索表と、日本に産する7亜科の中の日本に関係ある族と属の検索表を掲げ、その各々について大略の説明を加えることにする。

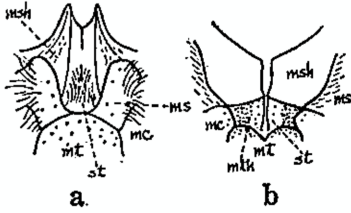
#### タマムシ科の亜科の検索表

1. — 触角の感覚孔は各鋸歯状節の両面に散布される (第3図a) ..... 2.
- 触角の感覚孔は各鋸歯状節の内側に散布されるか、または内側にある陥凹部に集中される ..... 3.
2. — 触角の感覚孔は一面に絹糸光沢のある纖毛におおわれる ..... Sternocerinae
- 触角の感覚孔は無毛 ..... Chalcophorinae
3. — 腹板窩は中胸腹板だけで形成される ..... 4.
- 腹板窩は中胸腹板と後胸腹板とにより形成されるか、またはほとんど完全に後胸腹板だけで形成される ..... 6.
4. — 触角の感覚孔は各鋸歯状節の内側に散布される ..... Trincopyginae
- 触角の感覚孔は各鋸歯状節の内側にある陥凹部に集中される ..... 5.
5. — 後胸後側板は著しく大型 ..... Schizopinæ
- 後胸後側板は狭い ..... Polycestinae
6. — 腹板窩は中胸腹板と後胸腹板とからなる (第4図a) ..... 7.
- 腹板窩はほとんど完全に後胸腹板からなる (第4図b) ..... 9.
7. — 顔面の下方は触角の挿入部によって狭められる ..... Chrysobothrinae
- 顔面の下方は触角の挿入部によって狭められることはない ..... 8.
8. — 小楯板は大きく、後方に狭まる。下唇茎節は大型ではほぼ三角形 ..... Sphenopterinae
- 小楯板は普通、稀に大型のこともあるが、後方に狭まることはない。下唇茎節は明かに横位で、三角形をなすことはない ..... Buprestinae
9. — 顔面の下方は触角の挿入部によって狭められる。触角窩は著しく大きく、複眼より離れて位置する ..... 10.
- 顔面の下方は触角の挿入部によって狭められることはない。触角窩は普通、複眼近くに位置する ..... Stigmoderinae
10. — 前胸背板の後縁は多少共波曲する ..... 11.
- 前胸背板の後縁は一直線で全く波曲しない ..... Mastogeniinae



第3図 右触角の内面

- a. ウバタマムシ  
b. クロタマムシ



第4図 腹板高

- a. ウバタマムシ  
b. ケヤキナガタマムシ

ms 中胸腹板, msh 同隠蔽部, mt 後胸腹板,  
mth 同隠蔽部, mc 中基節窩, st 腹板窩

11. — 中基節窩は前基節窩よりも広く距てられる…………… Trachyinae  
— 中基節窩間の距離は前基節窩間のそれよりも広くはない…………… Agrilinae

I Sternocerinae フトタマムシ亜科

我々のタマムシのイメージからは完全に離れた一群で、卵形で、中には全体に長毛を密生したグロテスクな種類もある。アフリカに最も種類が多く、地中海地方、近東から中央アジアにかけて6属を含み、*Sternocera* 属だけがアフリカからインドを経てインドシナ半島や中国南部にまで拡っている。一般に地味な渋い色彩の持主ばかりであるが、熱帯アジア産の *Sternocera* 属には華美な種類が少なくなく、金緑色に輝き、装身具に作られて販売される種類もある。

II Chalcophorinae ウバタマムシ亜科

タマムシ科の中の大型種のほとんど全部を含む亜科で、全世界の主として熱帯地方に多くの種類がある。次の3族に分けられる。

1. — 小楯板は背面より認め得る……………2.  
— 小楯板は背面より全く認められない……………  
……………Chrysochroini

2. — 後附節第1節は第2節より明かに長い……………

1) 東亞産の *Chalcophora japonica* Gory (ウバタマムシ) だけ例外である。

…………… Chalcophorini

— 後附節第1節は第2節とほとんど等長……………

…………… Psilopterini

A. Tribe Chrysochroini ルリタマムシ族

約20属を含み、東洋熱帯に最も多い。日本には次の1属だけを産する。アフリカ、オーストラリア東部にも数属を産するが、旧北区の大部分と北アメリカには全く産しない。南米には南端部のチリとアルゼンチンの一部に1属1種を産するが、これはオーストラリアに産するものに最も近く、南米の他の地方には全く産しない。この様な例は他の亜科にもあり、分布地理学上南米とオーストラリアが南極を通じて関聯があった例証とされる。

1. Genus *Chrysochroa* Solier, 1833 ルリタマムシ属

東洋熱帯、特にインドシナ半島、インド、マレー半島、スマトラ、ボルネオ、ジャバなどに多くの大型の美麗種を産するが、ジャバ以東のスンダ列島、セレベス、モルツカ諸島、フィリッピンなどその周辺地方になると急激に種類を減じ、ニューギニアとオーストラリアには1種もない。日本領には3種類あり、日本は最北、小笠原諸島は最東の分布地になる。

なお、従来本属の亜属とされてきた *Catoxantha* Solier, 1833 の記載は *Chrysochroa* Solier, 1833 の記載と同一論文に発表されているが、前者の方が、後者よりも4頁先であるため、1949年にフランスの Descarpentries はこの属名は *Catoxantha* を使うように提唱した。しかし、私は従来の *Chrysochroa* 属は5属に分割されなければならないと考えており、その場合、*Catoxantha* と *Chrysochroa* は別属になるので、少なくとも、日本周辺地域の種類に関しては、従来の *Chrysochroa* を用いてよいと考えている。

日本には次の3種を産する。

1. *C. fulgidissima* タマムシ (ヤマトタマムシ), 分布: 日本 (本州, 四国, 九州, 対馬, 屋久島, 種子島), 朝鮮, 台湾。
2. *C. alternans* Waterhouse オオシマルリタマムシ, 分布: 琉球 (奄美群島, 沖縄群島)。
3. *C. holstii* Waterhouse オガサワラタマムシ, 分布: 小笠原諸島。本州と台湾からの記録は誤と考えられる。

鹿児島から記載された *C. mikado* Obenberger ミカドルリタマムシは多分フィリッピン産の *C. fulminans tenuicauda* Kerremans ツマベニルリタマムシと同一種ではないかと考えられ、日本産の標本ではない。同様に「日本」から記録されている *C. vittata* Fabricius エグリルリタマムシ (中国, トンキン, ラオス, ビルマ, 北インド) や *Catoxantha opulenta* Gory ハネビロタマムシ (インド, インドシナ半島, マレー, スマトラ, ボルネオ, ジャバ) は明かに誤りである。(東京, 国立科学博物館)



日本における洞窟昆虫学の発展過程については既に上野俊一博士(1967)によつて詳しく述べられているが、洞窟とハネカクシを関連させた日本での報告は吉田品、野村鎮両氏(1952)によるものが嚆矢と思われる。両氏は奥多摩及び秩父地方の鍾乳洞8ヶ所を調査し、その結果として節足動物26種を記録(内3種は新種として記載)したが、この中で *Oxytelus vicinus* Sharp を日原鍾乳洞より記録、また青岩鍾乳洞より発見されたハネカクシを新種と認め *Coryphium japonicum* なる学名を与え記載し、全形図をも掲げた。しかしこの図から判断すると本種の複眼は良く発達して洞窟性昆虫としての形態的適応は全く見られず、恐らく外部より洞窟内に侵入したものと想像される。また図示された本種が、*Coryphium* 属よりむしろ *Philydrodes* 属により良く一致していることは既に上野俊一、渡辺泰明(1966)が指摘しており、最終的な判断はタイプ種の検討を俟ちたいが、本種が *Philydrodes* 属であれば、溪流際の石や落葉の下に棲息する本属のもの、吐水型の鍾乳洞への侵入は容易に推測することが出来る。

洞窟内で採集された種は全て真洞窟性であるとは限らず、むしろ外部よりの侵入者と考えられるものの方がはるかに多いのが実状で、Jeanel & Jarrige (1949) はヨーロッパ、アフリカ及び北アメリカ各地の洞窟より採集されたハネカクシ約150種を報告しているが、真の意味の洞窟性ハネカクシは極めて少なく、この中の100種以上は外来性のものと同氏等は考えている。

日本から真の洞窟性ハネカクシが報告されたのは1953年で、上野俊一博士は東京都奥多摩町にある倉沢鍾乳洞及び福岡県平尾台の千仏鍾乳洞の2ヶ所よりそれぞれ1種ずつ計2種のハネカクシが発見されたことを報じているが、前者は後に真洞窟性ハネカクシの新種として記載されたものである。その後中根猛彦(1955)、沢田高平(1956)、中根・沢田(1956, 1960)及び佐藤正孝(1964)の諸氏により日本各地の洞窟より5種類のハネカクシが記録されたが、これらの種はいずれも洞窟外の地表の落葉下等の場所より採集する方がむしろ容易な種で、真の洞窟性ハネカクシではなく、外来性或は好洞窟性の種と見做すべきものである。

真の洞窟性ハネカクシは上野俊一博士の精力的な

洞窟調査によつて採集された材料に基づき研究が進められ、その結果下記の5種が上野俊一、渡辺泰明(1966)により新種として記載された。

*Quedius (Microsaurus) fodinarum* S. Uéno et Y. Watanabe キウラツヤムネハネカクシ(大分県木浦鉾山の大谷坑と呼ばれている廃坑)

*Q. (M.) cephalotes* S. Uéno et Y. Watanabe ラカツヤムネハネカクシ(愛媛県羅漢穴鍾乳洞)

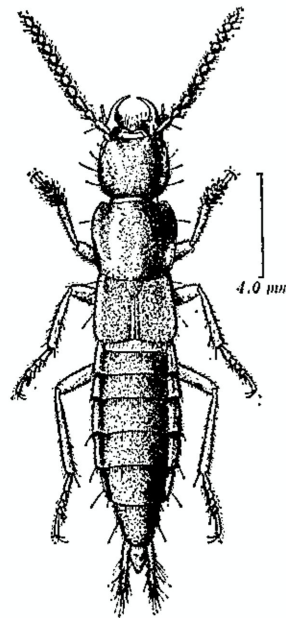
*Q. (M.) troglodytes* S. Uéno et Y. Watanabe カンナツヤムネハネカクシ(群馬県神流川流域に点在する生犬穴及び不二穴の各鍾乳洞)

*Q. (M.) sugai* S. Uéno et Y. Watanabe フジツヤムネハネカクシ(山梨県西湖蝙蝠穴熔岩洞)

*Q. (M.) umbratus* S. Uéno et Y. Watanabe クラサワツヤムネハネカクシ(東京都倉沢鍾乳洞)

上記の如くこれらの種は全て *Quedius* 属の *Microsaurus* 亜属に含まれるもので体長はいずれも12mmを越す大型種で、この様な大型種が洞窟内という特殊な環境でどの様な生活環を持っているかは非常に興味深い問題である。更に、これらの種は真の洞窟種としての形態的適応が良く示され、体色はいく分消失して暗色を呈し、複眼は極端に縮小して僅かに点状に残されているに過ぎない。これに反して触角及び脚は良く発達している。またこれらの種と併せて、馬場金太郎博士が妙高原東麓の関見峠の地中より多数採集された種をも新種として *Quedius (Microsaurus) babai* と命名記載されたが、本種の体色及び複眼の大きさは洞窟内より発見された上記諸種と山地の石の下より採集され記載された *Quedius (Microsaurus) abnormalis* Sharp との中間を呈していることは大変興味深い。

上述諸種の外部形態はそれぞれ非常に良く似ており、識別するには頭部及び前背板の長さや幅が手掛りの1つになるが、雄の交尾器は顕著に異っている。即ちこのグループの雄交尾器は側葉が融合して1枚になり中葉の腹面をおおっているが、*Q. (M.) fodinarum* はこの側葉が中葉よりはるかに短く、また *Q. (M.) sugai* 及び *Q. (M.) umbratus* では中葉が末端に向かって拡大し、裏面に点在している感覚粒が中央にはなく側方に分布している特徴が見られ、他の産地より採集された種の雄交尾器とはかなり異った構造を呈し



*Quedius (Microsaurus) umbratus* S. Uéno et Y. Watanabe, 1966 (上野俊一・渡辺泰明 1966 から転写)

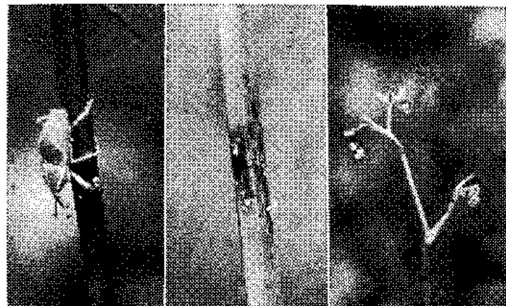


ている。また *Q. (M.) troglodytes* の交尾器は、日光より記載された地表種の *Q. (M.) abnormalis* のそれに他種より類似しており地域的関連性をうかがわせる。

以上の他、中根(前出)が *L. nomurai* として記載した種を含め、*Lathrobium* 属の数種が各地の廃坑や洞窟から発見されており、これらのあるものは体色や複眼等がいかに洞窟種らしい特徴を表わしている。しかしこれらの採集種数や個体数は非常に少なく、また本属には腐植土中等に棲息する地中種が数種知られていることを考え合えると、それらの種がたまたま洞窟内に侵入したと考えることも出来、真の洞窟種と断定するには更に今後の調査が必要である。(東京農大)

#### ○ワラビを食うオオシロオビゾウムシ

オオシロオビゾウムシ *Cryptoderma fortunei* Waterhouse は本州(近畿以西)、四国、九州、支那大陸等に分布する大型(13mm 前後)美麗種で、体全体が灰褐色の粉状体で密におおわれ、更に前胸側縁から翅鞘肩部を経て縫合線中央部に達する鮮かな白条が認められる極めて印象的な特徴を有するゾウムシである。草むらなどのビートンングで時々採集することができるが、いずれかといえば珍らしい種で、生態についても、成虫がクヌギの樹液に来るこ



(左:ワラビ茎上のオオシロオビゾウムシ。中央および右:オオシロオビゾウムシの食痕)

とを報じたものがあるだけで(本弘道崇:オオシロオビゾウムシ三重県に産す。新昆虫, Ⅷ(1), p. 46, 1955), その他にはまだこれといった報告は見当らない。幸い著者は、本年(1968)5月、五島列島福江島の調査をした際、翁頭山々麓で本種を採集し(5月19日)、その食草をも確認することができたので、ここにかんたんに報告しておくことにしたい。

筆者が採集した本種は全部で3頭であったが、これらはいずれもワラビの茎に頭を下にした姿勢でつかまり、茎内に口吻を挿入してこれを食害していた。ゾウムシ科の昆虫には茎内に窩をつくり、そこに産卵する種類がすくなくないので、試みに、傷つけられたワラビの茎をいくつか切開してみたが、どこにも産卵の形跡は認められなかった。あるいは、まだ産卵期に入っていなかったのかもしれない。なお、本種は太い茎だけでなく、未開葉の茎の先端部も食害するらしく、本種の食害痕と思われるものを、そ

うした場所にも認めることができた。

ここに述べた本種の習性から推してみると、本弘の報告した本種のクヌギ樹液への来集性は、その可能性は全くないといえないまでも、あまり一般的な現象ではないということができそうである。

(埼玉県鶴ヶ島町, 大野正男)

#### ○ヒメオサムシの分布南限

ヒメオサムシ *Carabus (Apotomopterus) japonicus japonicus* Motschulsky は現在のところ鹿児島市付近(嶋洪; 1963)から記録されたものが分布の南限であろうと思われるが、これより僅かに南に位置する大隅半島の高隈山(海拔 600m~800mの地域)で北野竜海氏によって採集された標本(2864♀, 18. ii. 1968)を見ることができた。鹿児島付近のものの中根博士(1962)によると体上面が黒色であるというが、これらの個体はすべて強い銅赤色、体は紡錘形で subsp. *lewisianus* (Breuning) に近似しており、念のため科学博物館の石川良輔氏にもお目にかけてみたが、前背板側縁の孔点などは上記の原名亜種の特徴を持っているという。九州北部の福岡市や北九州市近郊の平地のものは黒色大型のものが普通で、銅色のものは山地に現われる傾向があるが、鹿児島付近でも似た現象があるのかも知れない。交尾器は北九州や阿蘇山あたりのものと大差なかった。上記の両氏とともに文献について援助して下さった小倉勘二郎氏にお礼申し上げる。

(埼玉県草加市 三宅義一)

#### ○キンケトラカミキリ栗島に産す

新潟県の北端に近く日本海上に浮ぶ、面積僅か9平方余の1孤島一栗島は、我々にとっては何よりもその特産のアオマイカブリによって既に馴染深いところであるが、同島から従来知られている天牛は僅か30種にすぎず、いずれも同島特産と目されるものはない。本年6月、筆者は機会あって若干時間同島に滞在したが、その際同島未記録のキンケトラカミキリを下記のとおり採集したので報告する。

1♀, 栗島浦村内浦, 9. vi. 1968.

なお、同時に既記録のエグリトラカミキリ(1頭)、ホタルカミキリ(10頭)、ゴマフカミキリ(2頭)、ヒシカミキリ(1頭)も採集したので付記しておく。

(新潟県新発田市 小池 寛)

#### ○ミカゲゴモクムシを対島より採集

長崎県対馬で、ミカゲゴモクムシ *Ophonus (Pseudophonus) roninus* Bates を採集した。

1頭, 長崎県下県郡敵原町内山, 28. vii. 1965, 荻野芳郎。

藤原から内山に通ずる道路脇の水路に落ちて死んでいたもので、同島から初記録と思われるので報告する。本種は、一見オオゴモクムシによく似るが、全体が黒色なので、容易に区別することができる。

(横浜市保土谷区 柄沢保彦)

#### ○アオオサムシの異常活動

今年12月1日に庭先の落葉を掻き集めていたら、

アオオサムシが出て来た。落葉はプラタナスやモクレンなどの大型の葉ばかりで、その下は多少湿ってはいるが、到底その下で越冬出来るような場所ではなく、オサムシも越冬窩も作らないで、夏の活動期と全く同様の状態で動き廻っていた。おそらく、今年の暖冬のせいとは思いますが、12月の活動例は珍らしいであろう。(東京都世谷区 黒沢良彦)

○コメツキモドキ科5種の食草

コメツキモドキ科はオオキノコムシ科に近いが、生態的には食菌性でなく、生きた植物体に加害する。その加害植物は *Anadastus* 属では主としてイネ科植物、*Langriomorpha* 属ではシダ植物と、属によって特定の群に属する植物につくようであるが、私の確め得た5種類の加害植物を記録しておきたい。

1. ツマダロヒメコメツキモドキ *Anadastus praeustus* Crotch

加害植物：ススキ

2. viii. 1968, 岩手県水沢市羽黒堂。8頭をススキの茎から採集した。

2. ヒザグロヒメコメツキモドキ *Anadastus fucosus* Lswis

加害植物：ススキ

14. vii. 1950, 福島県大沼郡津高田町西尾。2頭をススキの茎に発見。

3. クロアシコメツキモドキ *Langriomorpha nigratarsis* Waterhouse

加害植物：クサソテツ

28. vi. 1939, 山形県米沢市。2頭を庭先のクサソテツの葉上に発見。この株には毎年発生していた。

4. ツシマコメツキモドキ *Tetralanguria fryi* Fowler

加害植物：ワラビ

8. vi. 1968, 対馬上県町仁田銅所。5頭をワラビの未開葉の茎に発見。頭を下にして止り、捕えようとすると、クルリと反対側に廻るが落下することはない。この他、峯村大星山、敵原町有明山でも全く同様の習性を確めた。

5. オオシマコメツキモドキ *Tetralanguria oshimana* Miwa

加害植物：シマオオタニワタリ

15. vii. 1963, 奄美大島宇檢村湯湾岳。2頭を湯湾岳中腹の林中に生えたシマオオタニワタリの葉上に発見。(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○オサムシ用トラップに入るカミキリ

オサムシ用のトラップには、オサムシの他ゴミムシ類、シデムシ類、クワガタ、コガネ、コメツキ等が入ることが多いが、カミキリが入る例はあまり知られていないようである。私を知っているのは奥村尚氏による大菩薩におけるフジコバヤハズの記録のみであり、歩行中のものが偶然落込んだものと思っ

ていたところ、最近かなり多数のカミキリをオサムシ用トラップで採集し、しかもそれが特定の種に限られているようなので報告する。

1) ノコギリカミキリ 1♂, 1. vii. 1968, 大菩薩

2) ホソガタヒメハナカミキリ 1♂11♀, 1. vii. 大菩薩; 1♀, 2. vii, 1967, 八ヶ岳

3) オオヒメハナカミキリ 1♂, 1. vii. 1968, 大菩薩

4) フジコバヤハズカミキリ 1♂, 1♀, 1. vii. 1968, 大菩薩; 1♂, 1. vii. 1967, 八ヶ岳

このほか、ノコギリカミキリについては本年北海道で3例を得ており、フジコバヤハズについては八ヶ岳でも1例を聞いたので、偶然ではなく、トラップの餌に集まるのではないかと推定される。餌としては、肉汁(固型スープ)、糖蜜、エチルアルコール、サルチルサンを水にとしたものを使用した。(東京都港区 小宮次郎)

○鹿の死体に集まった糞虫類

1968年9月22, 23日, 奈良公園と春日神社間において、鹿の死体に各種の糞虫類が集まっているのを観察した。このような例は珍しいと思うので報告する。鹿の内臓はかなり腐敗して甚だ臭気が強かったが、糞虫は、内臓の内部には少なく、直下の地中に潜っているのがほとんどであった。糞虫以外にも若干の甲虫類を確認したので付記する。なお個体数については、約100頭以上を“多”, 約10頭以上を“中”, 10頭以下を“少”と表わした。

ルリセンチコガネ(少), センチコガネ(中), ゴホンダイコクコガネ(多), カドマルエンマコガネ(中), コブマルエンマコガネ(少), マエカドコエンマコガネ(少), コツヤマグソコガネ(アサヒナマグソコガネ)(少), エンマムシ(中), ヒメエンマムシ(少), チャイロコガネ(1頭), オオアカバコガシラハネカクシ(中), クロガネハネカクシ(中), クロコガシラハネカクシ(中), *Philonthus* sp. (2種)(中), アカクビホシカムシ(中), アカアシホシカムシ(中), オオモモトシデムシ(1頭), コクロシデムシ(少), カツオブシムシの1種(少)

(東京都豊島区 近藤茂照)

甲虫談話会:

会費(1カ年)500円, 第5号は2月末発行予定, 投稿〆切は1月15日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電(822)0111, 振替東京 60,664

1969年度の新しい昆虫標本在庫品目録が出来上りました。甲虫も内外各地のもの多数在庫しますのでお申し込み下さい。  
東京都練馬区石神井局私書函3号 大蔵生物研究所